

平成30年度 関西福祉大学金光藤蔭高等学校 学校評価報告書

1 めざす学校像

建学精神	：我々が天地の大徳によって生かされ、家族をはじめ多くの人々の祈りによって育てられていることの自覚と感謝の念から発して、その自分を大切に、将来世のお役に立つ人間となって、世界真の平和達成と文化の発展のために貢献し、そこに生甲斐と喜びを見出す人でありたいという念願に立って、教育の徹底を期する。	
教育方針	：「学理求道」 確かな学問と豊かな人格を備え、大局観に基づく課題認識を持って、社会に有用たる生き方を求める人材を育成する。その人材を輩出することによって本校としての社会的責任を果たす。	
組織目標	：① 生徒一人ひとりを大切に教育内容と進路保障で応える学校	⇒教育
	② 社会の変化や時代の要請に応じて、常に改革・改善し続ける学校	⇒経営
	③ 教職員一人ひとりの高い職業意識と組織力で業務遂行する学校	⇒組織
スローガン	：「学びの場で、夢にチャレンジしよう！」	

2 中期的目標

1 法人理念と教育目標の遡求	(1) 法人理念の徹底
2 教育内容の充実改善	(1) コース内容の充実・検証 (2) 基本的学力の向上 (3) 生徒指導の充実 (4) 進路指導の充実
3 学校組織活動の充実発展	(1) 学校組織の活性化 (2) 組織と業務を通じた人材育成
4 広報募集活動の充実強化	(1) 広報募集の強化
5 創立100周年に向けて	(1) 問題解決型・未来志向型の学校風土の醸成

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価アンケートの結果と分析	
【アンケート】	○生徒 <平成31年2月実施> 授業内容を中心に学校生活全般について全校生徒に調査した。(16項目) ○教職員 <平成31年4月実施> 生活指導・授業評価・その他教育活動や学校改革(コース改編等)の成果について検証した。(16項目)
【分析】	○生徒アンケートではほとんどの項目で約65%以上の生徒が肯定的な反応を示している。 ○教職員による自己評価では、「6コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」と大半の教職員が実感している。また「校内研修や具体的な事例をもとにした問題解決型の業務を通して、教師力向上に取り組んでいるか」との項目でも80%を超える教職員が認識している。 今後も一人一人の生徒に寄り添った、丁寧な教科指導、生活指導を継続していきたい。
学校評価委員会からの意見 <平成31年4月26日開催> 学校評価委員 ①学識経験者：須田正信氏(大阪教育大学教授) ②学校近隣防犯委員：新居見英夫氏 ③本校PTA会長：村端時子氏	
○教育内容の充実改善について	り強い指導を継続していく事が求められる。
(1) コース内容の充実・検証 6つのコースを安定・充実される取り組みに努めている。教職員アンケートからは、「6コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」との自己評価をしていることからその成果が伺える。平成31年度に向けてコース内容の変更や改善を図り、さらなる成果を期待したい	○学校組織について
(2) 基本的学力の向上 「基礎学力がついてきた」と答えた生徒が66%と前年度より若干増えているとした報告があり、「授業はわかりやすく、工夫がされている」ことにも80%の生徒が満足を感じている報告にも基礎的学力向上への取り組みの成果が伺える。放課後活動の「特別講習」などの取り組みの成果などについても今後も努力を期待したい。	(1) 学校組織の活性化 生徒たちの学力向上や学校全体の活性化を促す教員の選考・任用を行うことでその成果がみられる。教職員の適性・能力に応じた校内人事や校務分掌についてもアンケート結果から75%の教職員が肯定的評価をしていることから、学校経営における組織マネジメントが機能していることが伺える。 (2) 組織と業務を通じた人材育成 分掌長、副分掌長を配置し、教頭補佐を学校運営の担い手として育成しているなど組織マネジメントに寄与していることが伺える。
(3) 生徒指導の充実 転退学者の約70%が不登校を含む学校生活学業不適応や進路変更を余儀なくされる生徒であることから、学校としてその対応が迫られていることが伺える。しかし、「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応している」に83%の生徒が肯定的に回答していることは大きな成果としてとらえている。今後も引き続き支援を必要とする生徒に対してカウンセリングマインドを持って教師が対応することを望む。	○広報活動について
(4) 進路指導の充実 全体の進学率が70%であり、大学進学が若干減少し、専門学校への進学率が若干増加している傾向がみられるが総じて進路指導に力を入れていることが伺える。引き続き家庭との連携を深め、粘	(1) 広報活動の強化 中学生・保護者対象のオープンスクールや学校教員や塾向けの説明会も開催し、各コースの体験授業も工夫を図り参加者の増加に寄与している。「エンカレッジコース」では、広く「学びなおし」を必要とする生徒へのニーズに対応していた。また、ホームページでの刷新に努力している。
	○その他
	(1) 問題解決型、未来志向型の学校風土の醸成 校長はじめ教職員が魅力ある学校づくりに尽力していることが伺える。

3 本年度の取組内容及び自己評価

目標 中期的	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
法人理念と教育目標の遡求	(1)法人理念の徹底 ア 本部参拝・本校感謝祭の充実 イ 心の教育を意識	(1) 法人理念の徹底 ア 学校行事として毎年実施の3年生本部参拝の充実を目指す。本校感謝祭も同様である。 イ 全人教育という観点から「社会的自我」と「生きていく力」を育成することに努める。	ア 学校行事として70%以上の生徒が認識しているか。 イ 式・行事や、学年・学級指導を通して70%以上の生徒が「心の教育」を実感しているか。	ア 72%の生徒が学校行事として認識している。3年生は全員が進路決定前に本部参拝を実施することで、「世のお役に立つ人間になる」との決意を新たにすることができた。感謝祭では参列した2年生全員が学校生活を見直し、感謝の気持ちを持って日々過ごすことを喚起できた。 イ 全校生徒の75%が心の教育を実感していると認識している。式や行事の他、学年集会や日々のホームルームでの指導が生徒に浸透しているようである。また昼休みや放課後、神徳堂（お広前）を訪れる生徒も多く、宗務科教員との対話を通して心の癒しを得ている生徒も多い。
教育内容の充実改善「コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導」	(1)コース内容の充実・検証 ア 文理進学 イ エンカレッジ ウ ライフクリエイティブ ITライセンス アートアニメーション エ トップアスリート オ 文科省委託事業	(1)コース内容の充実・検証 6つのコースを安定・充実させる。 ア 文理進学については、様々な学力向上施策を実施して内容の充実を図り、参加状況の増加に努める。平成31年度に向けて名称検討を行う。 イ エンカレッジについては、入学前面談や個別教育支援計画の作成等を丁寧に行い、基礎学力の補充と体験型授業で指導の充実を図る。平成31年度に向けて多くの対象者に対応できるようにする。 ウ ライフクリエイティブ・ITライセンス・アートアニメーションについては、専門学校との連携を進め、内容を充実させる。 エ トップアスリートについては、6強化クラブの実力アップと次年度募集クラブの検討を行う。 オ 文科省委託事業の取組み（2年目） 「発達障害に関する専門性向上事業」 課題を抱える生徒へのアプローチに、特別支援教育の教育活動の視点を生かす。	ア 7時間目の授業や進学講習、長期休業中の特別講座や学習強化合宿を行い、基礎学力の向上や受験対策を行う。 イ エンカレッジコースの生徒の出席状況・進級を充実させる。エンカレッジ生徒の対象を広げて募集する。 ウ ライフクリエイティブ(スペシャリティークラス)を充実させる。専門学校との連携により、生徒の関心に応じた体験講座に入れ替える。 エ 強化クラブの実績アップと次年度募集を成功させる。女子サッカー部・男子バレーボール部の募集停止、女子バスケットボール部の募集開始を行う。 オ 2年目となるため、外部への発表や文科省への最終報告を行う。	ア 文理進学では1・2年生の全員が夏の勉強合宿に参加した。2年次からは文系・理系に分かれての授業を実施し、理系希望の生徒のための特別講座や受験指導にも力を入れた。平成31年度は「特別進学」コースとして再度文系に特化したカリキュラムにすることで大学進学率を向上させたい。 イ エンカレッジコース開設2年目、個別の教育支援計画、個別の指導計画を立て、担任を中心に関係部署と連携を取ることで生徒の90%が進級することができた。定期的に保護者との交流会(COCORO 食堂)も開き、家庭との連携をより密に行った。 ウ ライフクリエイティブコースはスペシャリティークラスを編成して2年目、卒業した生徒は協力校である辻学園、NRB 日本理美容専門学校にも多数進学した。今後もより強い連携を続けたい。 エ トップアスリートコースは「アートアニメーションコース」として独立させることによって目的意識をはっきりもった生徒の確保につながった。提携している大阪アニメーションカレッジ専門学校による特化した授業が実践できた。 オ トップアスリートコースは、女子ソフトボール、男子バスケットボール・男子バレーボール・男女柔道が近畿大会に出場した、男子バレーボール部は全国私学大会にも出場し、女子ソフトボール部は全国私学大会で3位に入賞した。ラグビー部は全国選抜大会に出場し、1勝した。3学年とも2クラス編成となり、平成31年度の募集も安定が見込まれる。 エ 女子サッカー部は入学希望者減により平成30年度から募集停止とした。また男子バレーボール部も平成31年度からの募集を停止する。一方女子バスケットボール部を平成31年度から新設し、トップアスリートコースの活性化につなげたい。 オ 外部の専門家によるコンサルテーションや対象生徒にかかわる教員を中心とした研修ワーク等を通して、学校としての目標を明確にし、生徒のニーズにこたえられる教育支援の実践を全教員に促すことができた。

<p>(2)基本的学力の向上 ア 全生徒への基礎基本の徹底 イ 学習意欲のある生徒へ特別対応 ウ 研究授業の実施 エ 生徒の授業評価</p>	<p>(2)基本的学力の向上 ア 基礎学力指導(HR)や学習方法の充実・工夫に力を入れる。 ア「眠らせない」「集中させる」授業を実施する。 イ 外部機関や人材を活用した学習場面(放課後の自学自習サポート教室・塾講師による特別教室)を質量ともに拡充する。 ウ 授業改善や授業力向上に向けて精力的に取り組む。(研究授業・公開授業・研修等) エ 生徒による授業評価を授業改善に活かす。</p>	<p>ア 時間割に設定した「学びたいむ」、リクルートのスタディサプリの利用についての生徒たちが基礎学力向上の効果の実感を70%以上感じているかどうか。 ア 授業者への意識喚起と、管理職や学年部長による授業巡視を行う。 イ 時間割以外の学力向上の取り組みに対して満足度70%以上を目標にする。 ウ 教諭・常勤講師を対象として各教科で年間2回の期間を設けて研究授業を実施する。 エ 教諭・常勤講師全員が授業アンケートを行い、生徒による授業評価を分析する。</p>	<p>ア 「学びたいむ」では各学年・コースごとに生徒の学力に合わせた学びなおし教材を工夫し、「基礎学力がついてきた」と答えた生徒が66%と前年度の65%より若干増えている。今後も3年間を見据えた取り組みを計画し、生徒の70%が達成感を感じるような教材の選定、授業を継続させていく。 イ 放課後に実施した特別講習を受講した生徒の全員がその内容に満足している。また自学自習サポート教室(藤蔭塾)も大学生のアシスタントが教科のみならず、小論文や自己推薦書等の指導もサポートしてくれたことで生徒たちの学習意欲を高める一助となった。 ウ 公開授業・研究授業の実施後各教科で検証し、授業改善につなげた。今後も継続していきたい。 エ アンケートで「授業はわかりやすく、工夫がされているか」との質問に80%の生徒が満足を感じている。しかし、科目別担当者によっては課題が残る授業評価もみられたので、アンケート結果を教科内で共有し、教員一人一人の課題克服につなげていきたい。</p>
<p>(3)生徒指導の充実 ア 生活・学習習慣の確立 イ 欠席者・遅刻者の改善 ウ 挨拶・マナー等の徹底 エ 生徒間のトラブルや、生徒指導案件の改善 オ 人権侵害事象の根絶</p>	<p>(3)生徒指導の充実 ア 転退学者数の改善を継続して行う。「3年間お預かりして育てる」「社会のよき構成員として世に送り出す」という使命感を大切ににする。 ア 生活習慣・学習習慣や自尊感情の醸成に力を入れて、出席状況や授業態度の改善に取り組む。 イ 学級経営の充実を図り、「欠席しない、遅刻しない」登校したくなる学級集団の構築に努める。 ウ 登下校時、ホームルーム、授業開始・終了時の挨拶習慣化とともに、外来者に対する挨拶を励行させる。 ウ クラブ加入率を上げ、部活動を通して、集団での協調性・規範意識に対する向上心を育てる。 エ 社会規範を理解させ、また高校生らしい対人関係を身に付けさせる。生徒間の人権侵害事象は起こさせない。</p>	<p>ア 転退学者数を昨年度の54名から40名未満に減らす。(6%未満) ア 始業時間ギリギリに登校する生徒に時間に余裕を持った登校意識を持たせる。 イ 朝の立番指導を行い、遅刻者の減少に取り組む。 ウ 望ましい服装・髪色・身だしなみや、挨拶を徹底させる。 エ 生徒指導案件を昨年度より減らす。人権侵害事象はゼロを目指す。</p>	<p>ア 転学者数 H27年度→45名(5.89%) 転学13 退学32 H28年度→53名(6.62%) 転学25 退学28 H29年度→54名(6.67%) 転学21 退学33 H30年度→48名(6.23%) 転学23 退学25 平成30年度の転退学者率は昨年より若干の減少が見られた。しかし転退学者の約70%は「不登校」を含む「学校生活学業不適応」や「進路変更」が理由であり、昨年より大幅に増えている。本校の入学生の多くが小学・中学時に家庭的、経済的、学習的に多くの課題を抱えている背景があることは否めない。アンケートで「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応しているか」という質問には83%の生徒が肯定しているが、生活習慣未確立や学習習慣のない生徒の自尊感情の醸成にさらに力を入れ、出席状況や授業態度の改善に取り組みたい。 イ 朝の立番指導や放課後の学年指導、定期的な保護者召喚によって年間の遅刻者総数は昨年度の8008名から4019名と減少した。今後も継続的かつ粘り強い指導が必要であると思われる。 ウ 90%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行なっている」と答えている。いろいろな場面での挨拶指導が浸透してきている。さらに徹底した指導を継続していきたい。 エ 生徒指導件数は39件で、昨年の50件より減少した。日々の生徒指導の積み重ねで、指導事案を未然に防ぐことができた。人権侵害事象はゼロであった。</p>
<p>(4)進路指導の充実 ア 進学実績の向上 イ 望む職業への就労実現</p>	<p>(4)進路指導の充実 ア 大学・短大・専門系学校への進学実績を向上させる。 イ 卒業段階での未進学者・未就労者の数を減らす。</p>	<p>ア 大学・短大・専門系学校全体の進学者を前年度よりアップさせる。 ア 四年制大学進学率も前年度よりアップさせる。 イ 未進学・未就労率を0にする。</p>	<p>ア 全体の進学率は平成29年度の69.0%から70%へとほぼ横ばいである。大学進学率は昨年度の35.1%から34.6%へと若干減少し、専門学校の割合が増加した。 イ 進学希望者の中での未決定率は浪人希望を含め2.5%と昨年度より増えている。就職希望者の中での未決定者は0.8%であり、学業、出席状況を鑑みて進路指導が困難な生徒もいた。今後も粘り強い進路指導を継続していきたい。</p>

学校組織体制の改善	(1)学校組織の活性化	(1)学校組織の活性化 ア 組織的・機動的な学校体制の確立 教科指導やクラブ指導には専門性が必要、学年や分掌組織は組織力・機動力・実行力が必要である。それぞれが、連携を密に活発な業務活動を展開する。 イ 熟慮判断を旨とするが、ネットワークとスピード感を持った業務展開をして、生徒と触れ合う時間を確保する。	ア 準専任教員・常勤講師の任用試験を厳密に実施する。また適性を配慮した人事配置を行う。 ア 教諭・常勤講師と様々な場面で時間をかけた対話を行う。	ア 将来にわたり積極的に本校での教育活動を推進しようとする常勤講師を対象に、準専任教員選考試験を実施し、7名の内2名の教員を任用した。今後は生徒募集はもとより、生徒たちの学力向上や学校全体の活性化を促す教員の選考・任用を継続して行っていく。 ア 教務学事系4部、総務企画系3部の計7部がそれぞれに機能し、連携を取り合って円滑に業務を進めた。また各担任は生活指導・学習指導、進路指導に対して、生徒の実態を常に把握し、いち早い対応に努めた。なお、教職員の適性・能力に応じた校内人事や校内分掌が行われているかについてのアンケートでは概ね75%の教職員が肯定している。
	(2)組織と業務を通じた人材育成	(2)組織と業務を通じた人材育成 ア 管理職や分掌組織の組織的業務を通してミドルリーダーを育成する。 イ 課題山積の学校である。様々な学校課題を提示して、課題解決型の業務を展開し、学年部長・分掌部長等を活かして、OJTで育てる。	ア 管理職や校務運営委員会メンバーを含めてミドルリーダーの層を厚くする取り組みを行う。 イ 学年部長・分掌部長に企画提案型で業務を遂行させる。 イ 重要な学校課題を提示して、課題発掘・解決型の業務を実践させる。 イ 私学は教員の研修機会が少ない。人材育成の観点で、研究研修部を通じて外部研修会等へ積極的に出席させる。	ア 7部での仕事を学校全体として機能させる分掌長、副分掌長を配置し、教頭補佐(分掌長兼務)を学校運営の要を担う人材として育成した。 イ 新任の常勤講師対象の研修を充実させ、学年部長や分掌長が中心となり学級経営、生活・学習、学校業務に関する細かい指導を行った。ミドルリーダーはまた日々の業務から重要かつ、最優先の学校課題を見つけ出し、速やかに改善策を考え実践するよう努めた。教員の87%がその取り組みを認識している。また研究研修部が様々な校内・校外研修を提示し、若手教員も積極的にそれに参加し、自己研鑽力を高めている。
広報募集活動の充実強化	(1)広報募集の強化 ア 組織的な広報展開 イ 外部広報のアピール力アップ ウ 入学生徒の確保	(1)広報募集の強化 ア 入試広報部の組織的な広報展開 イ 外部広報のアピール力アップ 生徒・保護者・中学校・塾等に受け止めやすい、わかりやすい広報に努める。 平成31年度からは校名を「関西福祉大学金光藤蔭」から「金光藤蔭」と改める。 ウ 入学生徒の確保 平成31年度入学者を増やす。本校を対象とする生徒層を本校の「学校体制」と「教育内容」で丁寧に3年間育て上げるということで、生徒・保護者・中学校・塾等の外部評価を得る。	ア 中学校長経験者の人材を活かした広報展開を行う。 イ 特にクラブ活動や学校行事の内容を充実させ、わかりやすく、関心を持たせるホームページ、学校案内に改善する。 ウ 平成31年度は平成30年度の入学者減を挽回するため、目標300名とする。	ア 中学生・保護者対象のオープンスクールを3回、入試説明会を4回、中学校教員や塾向けの説明会もそれぞれ実施した。学校紹介、各コースの体験授業にも改良を加え、参加者は昨年度より微増している。特にエンカレッジコースの参加者は昨年度に比べて大幅に増加し、結果として他コースを含めた全体の受験者数増加へとつながった。「メディアアートクラス」を「アートアニメーションコース」として独立させることで特色を明確に打ち出し、生徒確保につなげることができた。平成31年度入学生より「エンカレッジコース」は不登校生徒に限定せず、広く「学びなおし」を必要とする生徒にも募集を広げ、外部に積極的にアピールすることでさらなる生徒確保をめざしたい。 イ ホームページは中学生や保護者によりわかりやすい内容やデザインに刷新した。 ウ 平成29年度入学生は297名、平成30年度入学生は255名と昨年度を若干下回った。しかし平成31年度は329名と前年度を大きく上回った。来年度も引き続き、300名を超える入学者確保を目指したい。
	創立一〇〇周年に向けて	(1)問題解決型、未来志向型の学校風土の醸成	(1)大局観による未来志向型の学校風土 10年先に向けて連帯して問題解決にあたる学校風土を醸成する。	様々な学校課題に連帯感をもって、前向きに取り組み、学校の一体感を醸成する。